

付表 3. 施設別 2014-2015 年 5 年生存率集計

施設別 2014-2015 年 5 年生存率集計

本章では、施設別の生存率について集計を行った結果を報告する。**なお、生存率には様々な要因が影響を与える。施設別の数値を参照する前に、各施設のコメントを必ず参照頂きたい。**施設別の生存率集計値の公表については、各施設に公表の有無についてご判断いただいた。

- ・実測生存率をがん別及び UICC TNM 分類総合ステージ別に推定
 - *施設別ネット・サバイバルは、他死因を調整しきれない可能性があるため算出せず、実測生存率のみ算出する
- ・集計対象がん: 胃がん(胃癌)、大腸がん(大腸癌)、肝細胞がん(肝細胞癌)、非小細胞肺がん(非小細胞肺癌)、女性乳がん(女性乳癌)
- ・対象例: 自施設初回治療例(症例区分 2, 3)、
悪性新生物<腫瘍>(一部良性、良悪性不詳の脳・中枢神経系の腫瘍性疾患)、年齢 0~99 歳
- ・全がんの生存状況把握割合が 90%の施設

なお、データ収集は、当該診断年の院内がん登録全国集計(0 年)に参加した病院であり、予後情報付データを提出できる施設のみを対象としている。本集計データの精度は施設によっても異なる可能性があり、生存率の解釈には注意を要する。

施設における 5 年生存率を解釈するためには、様々な予後に影響する要因についても合わせて検討する必要がある。ここでは、参考資料として年齢別登録数、UICC TNM 分類総合ステージ別登録数(肝細胞がんについては、取扱い規約分類を含む)、観血的治療実施別登録数、発見経緯等を提示した。施設別の集計結果を参照する際には、これらの要素・割合が異なる場合には生存率の推定値に影響を及ぼすため、**単純に本集計結果をもって当該施設のがん医療の優劣の評価にはつながらないことに留意されたい。**なお、今回参照として提示している病期や年齢以外にも、各都道府県・がん診療連携拠点病院におけるがん診療体制の違いによる対象者の違いや併存症、重症度等も生存率には影響を与えることに留意する必要がある。

本報告書は、こうした情報を国民へ公開することを通して、医療の透明性を確保するとともに、がん診療連携拠点病院等が一丸となってがん診療を行なっていることを示すためのものである。また、各医療施設においては、単純に他施設と比較することは難しいが、自施設の情報を加味してデータを見ることにより、自施設での診療実態の把握、さらなるがん診療の質の向上に向けて取り組むことが期待されている。